

相阿彌・過剋齋宛

君臺觀左右帳記
(公刊)

はしがき

こゝに掲げた君臺觀左右帳記は相阿彌のものであるが、原本には表題が付いてゐない。然し類書によつて、この名をつけた。表題の君臺觀左右帳記の名は原本では繪之筆者の見出しの次に小さく書かれてゐて、しかもその部分は抹茶壺形と盆香合ほり物の名との間に入つてゐる。それは恐らく後に誤つて綴られたのではないかと思はれるので、他のもの如く最初に出して置いた。この書の原本も前に公刊された能阿彌本珠光宛のものと同筆の古寫本である。宛名は過剋齋千阿彌で大永三年に書かれたものである。過剋齋千阿彌は一般に千利休の祖父と傳へられる人物である。またこの傳書を大永七年に寫してゐるのも、千阿彌と云ふ名であるが、過剋齋とどういふ關係の人物かわからない。傳書の奥書文面から考へて父子の關係ではないやうである。この書は相阿彌傳書の後期に屬するもので、能阿彌本と圖などは共通のものが多く、座敷飾りの説明は全く變つた獨自のものである。相阿彌のこの時代のものには畫家の名を入れたものはほとんどないが、これは異例の方で、この部分については疑問がある。それについては拙稿「君臺觀左右帳記の建築的研究」の中で考へて置いたが、要約すれば、相阿彌の初期の書に畫家の數が百七十人餘出てゐるのに、これは百五十人であつて、能阿彌の大内左京大夫宛君臺觀に近いこと、また相阿彌初期の書に王維とか僧法常と記してゐるのを、これには王摩詰とか僧牧溪としてゐるのも、能阿彌の前書と同じである。これらから考へて恐らくこの部分は、相阿彌傳書には初めからなかつたのであるが、後の人が、能阿彌大内宛本のものによつて、補つたのであらうと考へられるのである。然しこの書は群書類從が傳へる能阿彌大内宛本とは、終りの方には少し順序の異つた所がある。またこの書によつてそれが正される處も少くないやうに思ふ。例へば馬麟の説明の所に、群書類從本は馬遠弟子と記してゐるが、これは馬遠の子として居て、他の書もさうなつてゐるし、事實馬遠の子であり、この方が正しい。また易元吉の説明なども、群書類從本では「猿猴色取」としてゐる所をこれは「猿鹿色トリ」としてゐる。能阿彌相阿彌の他の書が皆「猿鹿」となつてゐることから考へて、やはりこの書が正しいやうに思はれる。これらはほんの一例に過ぎず、尚いろんな問題を含んでゐるやうに思へるが、この部分は美術史家の研究にまたう。

また座敷飾の部分は群書類從に收められた相阿彌本御節記と同一種類である。然し群書類從本は非常に誤が多く、これによつて正すべき處を少からず見出す。例へば群書類從本の最初の「四幅一對……」の項は、この書の如く座敷飾の終に入るべきものであること、他の相阿彌本もさうであるし、また意味もさうでなければ續かない。また東山殿の部分に於ても、これには會所の部分と常御殿の部分に分つて、説明されてゐるが、群書類從本は「常御殿」の文字が抜けてゐるために、東山殿の全體が會所から一續きになつて了つてゐる。また西指庵の説明なども、脱字があつて持佛堂と一續になつて、その意味がまぎらはしくなつて了つてゐる。また挿圖に於ては一層はげしく群書類從本は歪められてゐる。群書類從本は世に最も行はれてゐるのであるが、それはこの書によつて今日かなり多くのものを正さなければならぬであらうと思ふ。

この書の原本は前にも述べたやうに徳川宗敬伯爵家藏である。なほ他に異本として數種のものがあるので、それらによつてこゝでは補つて置いた。文中「……」としたのはそれである。これは既に美術研究に公刊されてゐる永祿二年古寫本君臺觀左右帳記に比して相阿彌のこの種傳書の發展を示す興味ある後期の例として、また前に出した能阿彌珠光宛本と共に慶長年代をあまりに降らない古寫本として注意すべきもの一つである。最後にこの書の書寫及び撮影を諾された徳川伯爵家の御好意に感謝し、また寫眞撮影にあつて盡力された美術研究所員の方々に謝意を表す。

一繪之筆者上中下

君臺觀左右帳記

| | | | | | | | |
|------|-----------------|------|--------------|------|-----------|-----|-------------|
| 曹弗與 | 佛像 | 吳道子 | 觀音色取 | 西金居士 | 羅漢色トリ | 任康民 | 山水人形色トリ |
| 王摩訶 | 山水人形色取 | 徽宗皇帝 | 山水人形色トリ | 胡直夫 | 山水人形牛墨繪 | 玉李 | 人形鳥獸墨繪モアリ |
| 李龍眠 | 羅漢人形馬形スミ繪モ在 | 李成 | 山水人形花鳥色トリ | 張芳汝 | 山水人形牛墨繪 | 柯山翁 | 人形竹墨繪 |
| 郭熙 | 花葉折枝色トリ | 徐熙 | 花取獸色トリ | 明鐵鏡 | 人形草花スミエ | 卒翁 | 布袋スミエ |
| 趙大年 | 山水人形水鳥色トリ | 易元吉 | 花鳥猿鹿色トリ | 戴嵩 | 牛墨繪 | 戴嶧 | 嵩之子牛 |
| 陳所翁 | 龍鳥人形枯木竹墨繪 | 僧牧溪 | 人形山水龍虎花 | 文與可 | 山水竹スミエ | 蘇東坡 | 枯木竹スミエ |
| 玉潤 | 竹山水草花 | 李唐 | 山水人形牛墨繪 | 米元章 | 山水竹スミエ | 柯澄 | 神佛色トリ |
| 李迪 | 人形山水牛花鳥色トリ | 李安 | 山水人形花鳥獸鷹 | 楊補之 | 櫻竹鳥墨繪 | 米元暉 | 山水スミエウス色トリ |
| 蘇漢臣 | 人形色トリ | 閻次平 | 山水人形牛色トリ | 馬達 | 山水人形花鳥馬遠兄 | 王若水 | 山水人形花鳥墨繪モアリ |
| 馬公顯 | 山水人形花鳥色トリ | 馬遠 | 山水人形花鳥色トリ | 楊月磻 | 花鳥龍虎墨繪 | 王若水 | 山水人形花鳥墨繪モアリ |
| 梁楷 | 山水人形鬼神色トリ墨繪モアリ | 夏珪 | 山水人形墨繪アリ | 王元章 | 梅色取モアリ | 張遠 | 山水人形花鳥馬遠之弟子 |
| 毛益 | 花鳥獸色トリ | 樓觀 | 山水人形花鳥色トリ | 周丹士 | 人形佛像 | 此山 | 菓子墨繪モ有 |
| 陸青 | 山水人形花鳥鬼神馬遠子 | 蘇顯祖 | 人形山水 | 賴庵 | 魚虫墨繪モアリ | 王立本 | 人形花鳥色トリ |
| 馬麟 | 山水人形花鳥 | 蘇顯祖 | 人形山水 | 張仲 | 人形羅漢 | 張伯 | 鳥人形觀音墨繪 |
| 范安仁 | 水魚 | 舜舉 | 山水人形花鳥墨繪モアリ | 張仲 | 山水人形牛墨繪 | 高然 | 山水墨繪有元暉ニ似タリ |
| 顏輝 | 山水人形鬼神花鳥猿スミエモアリ | 絲君澤 | 樓閣山水人形馬遠夏珪弟子 | 徐澤 | 鷹鳥 | 張氷涯 | 鷹色トリ |
| 月山 | 山水人形花鳥馬形獸墨繪モ在 | 張思恭 | 山水人形佛像墨繪 | 季宗皇帝 | 人形鳥獸色トリ | 夏明遠 | 山水墨繪有 |
| 無準和尚 | 讚人形スミエ | 張思恭 | 人形佛像色トリ | 張德麟 | 山水鳥色トリ | 李堯夫 | 人形仙人色トリ |

君臺觀左右帳記

三三

下

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|-------------|-------------|----------------------------|-----------|----------------|----------------|---------------|-----------------|----------|-------------|-------------------|-----------|-------------------|------------|-------------|--------------|--------------|------------------|------------|----------|
| 檀芝瑞竹墨繪 | 閣立德 山水色トリ | 李思訓 山水林泉色トリ | 李仲和 人形馬鷹色トリ | 姜道隱 山水松石 | 蘇過 東波ノ子竹墨繪 | 趙子固 梅水仙花蘭墨繪アリ | 廉宣 山水枯木柏竹墨繪 | 瑩玉磻 山水惠崇弟子ウス色トリ | 僧日觀 蒲萄墨繪 | 馮大有 蓮荷 | 陳清波 鐘馗三教色トリ | 趙子昂 山水竹 | 趙子昂 山水人形花鳥馬形墨繪モアリ | 李息齋 竹ノ墨繪モ在 | 朱德潤澤民 山水色トリ | 胡庭暉 山水花鳥極色トリ | 天師太玄 龍墨繪 | 柏子庭 胡木菖蒲スミエ | 雪澗 文殊達磨色トリ | 松田 栗鼠墨繪 |
| 論法師 | 閣立本 立德之弟山水同 | 韓幹 馬形色トリ | 元嬰 不審(ハチ)蝶(ハチ)の字不明のためか蝶色トリ | 惠崇 芦雁鳥色トリ | 劉坦 然 人形仙人墨繪モアリ | 如齋 松竹石蘭(マ)スミ斗書 | 湯叔雅 梅竹松石ウス色トリ | 僧羅窓 與牧溪同時竹 | 僧澤翁 山水梅竹 | 馬興祖 山水人形色トリ | 劉朴 馬遠ノ筆法人形梁楷弟子色トリ | 顯宗皇帝 人馬猿鹿 | 趙仲穆 山水馬形花鳥墨繪在 | 李遵 山水竹石 | 孟玉磻 山水花鳥色トリ | 王庭吉 山水花鳥墨繪モ有 | 僧明雪窓 芝蘭色トリモ有 | 因陁 人形仙像(佛カ)色トリモ在 | 用田 栗鼠スミエ | 錢永 花鳥色トリ |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|--------|-------|----------|------|------|----------|--------|--------|-------|-------|------|---------------|---------|--------------|------|---------|------|-------|-----------|----------|---------|-------|--------|-------|------|-------|
| 默菴 牧溪再來山水人形墨繪 | 孫知單 栗鼠 | 祭山 羅漢 | 迦羅密 梵僧佛像 | 猪者 牛 | 頂雲 蘭 | 噯子 觀音色トリ | 陸仲澗 佛像 | 陸王三郎 同 | 子良 人形 | 紅眉 人形 | 松齋 梅 | 邊景昭文進 花鳥山水色トリ | 阿加々 女觀音 | 衡陽 綠(首世カ)菴羅漢 | 揚枝 梅 | 一菴道士 人形 | 老融 牛 | 陸信忠 牛 | 普悅 仙(佛カ)像 | 李聞一 十王佛像 | 李萬七郎 仙像 | 蕉訓 人形 | 李堯民 人形 | 仲華 光梅 | 士廉 鳥 | 汝一子 松 |
|---------------|--------|-------|----------|------|------|----------|--------|--------|-------|-------|------|---------------|---------|--------------|------|---------|------|-------|-----------|----------|---------|-------|--------|-------|------|-------|

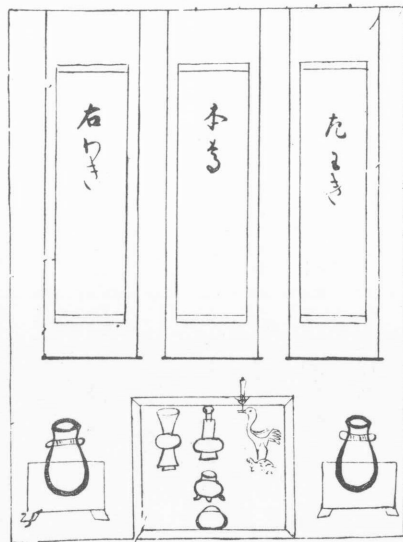
一 御座敷飾之事昔の御かさりハ一向覺不申候、一亂中、小川御所御飾其以後東山殿御飾少々覺申候分註付候也

一 小川御所御對面所五間、二間押板南向御繪三幅一對如常御か、り有、御三具足御卓にすはる(同脇に花瓶一對御卓に居る)上に風りやうかゝる

一 東の方押板にそひて一間の違棚御座有如此

(座敷飾り第一圖略)(能阿彌珠光宛本座敷飾り第二圖とあまり變らない圖)

右わき 本 左わき
 簾 簾



(圖二第リ飴敷座)

おしいた三間・一間半中同前たるへく候
 五幅一對も如此にて候、四幅の時ハ飾替
 へく候

一此おし板のつき、西の一間に小繪二幅一對かゝりて其下に、曲録けいしやうのくりくゝをたてらるゝ也
 一三幅の繪の間をなしものなり
 一押板の三具足の卓、脇の卓とのあ
 いたもおなしものたるべく候(繪のあいた卓の間をも能く寸
 を取而同程におかるへし)

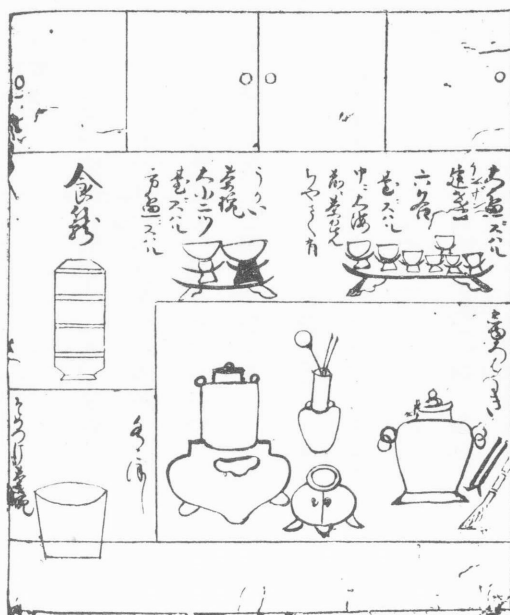
一東のおち間、西の方北のきは一間(の)
 御茶湯棚御對面所の次(にかくの如くかまへて御座あり)

(この所に次ぎの第三圖あり)

一御棚の置物如此御たな南のわきになら
 (奈良)

君臺觀左右帳記

大盆ニスハル
 建書
 六客
 臺ニスハル
 中ニ大海
 前ニ茶筌
 ちやさく有
 うかい
 茶碗
 大小ニツ
 臺ニスハル
 食籠
 しゆるはうき
 水こぼし
 そめつけ茶碗



(圖三第)

紙置るゝ、上に文沈置るゝ、
 一御對(面)所の西(おもて)御ひん所、是も五間東の方に
 御すしの御たなおかるゝ上重にはかさねす、
 りおかるゝ、次の重に三代集をかるゝ、下
 の重に水引の箱、料紙箱をかるゝ、

棚の南のきはに、文臺硯、引合一帖、杉原
 一帖上に文沈をかるゝ、同西の北きはに御
 劍御打刀、次に御鏡臺、御ゆすりつき臺おか
 るゝ也

御ひん所の北、御しん所の御床あり、上に御ふく
 の臺をかるゝ、

三五

一同次御間、西むきに、床御座有、床の上
に、書院御座有候所、北の方向中(御)違
棚(御座)有

圍筒クシ入
香爐臺
香合
開香爐
藥器
著
有へし
方盆



(圖 四 第)

(第五圖略)(能阿彌珠光宛本座敷飾り第一圖に似る)

東の御殿の分如此

一同西の御所御五間御南むき北の西より一間、間中(の)御床上
に、押板御座有、御繪三幅一對、如常に(御掛有御三具足脇
花瓶常のことく)上に風涼かゝる

一西の落間四帖敷二帖敷の床に、書院

南むきに御座有、西の方に一間の違棚有、

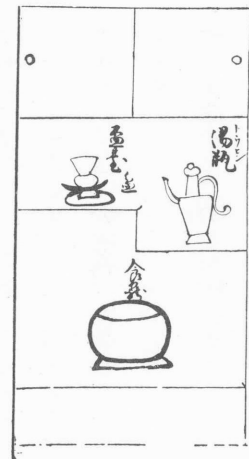
書院の置物、同前御違たなのおきもの如此

(第六圖略)(能阿彌珠光宛本第三圖に似る)

一御面たうつゝきに、西の方に御泉殿有、
うしとらのすみに御ちかひたなあり

以上西の御殿の分是まで(にて)御座候

湯瓶
盃臺盆
食籠



(圖 七 第)

一 東山殿

一御會所、九間、嵯峨乃間、北東二間押板、御繪御三具足、わ
きに花瓶以下如常、上に風

涼かゝる、押板の前に、中央の卓推紅をか

る、上に香爐胡銅すえ候前に歸花の

藥器一つをかる、十月より御火鉢七寶瑠璃

置臺にすはる、同火箸も七寶瑠璃也、

三月晝迄

一八景の八幅、四幅一對のよこゑ、東西の小

かへにかゝる、さかの躰をかき申候

一西の六間御置物なし、夏斗小壁に四幅

一對の繪、西東に二幅つゝかゝる

一東、狩の間、南に三帖の床御座有、一間半中

の書院御座あり、御かさり如常、同東の方

一間の御ちかひたな御かさり小川の御所の

ことし、是も夏は四幅(一對)の繪、西東の

小壁にかゝる狩の躰かき申候李安忠

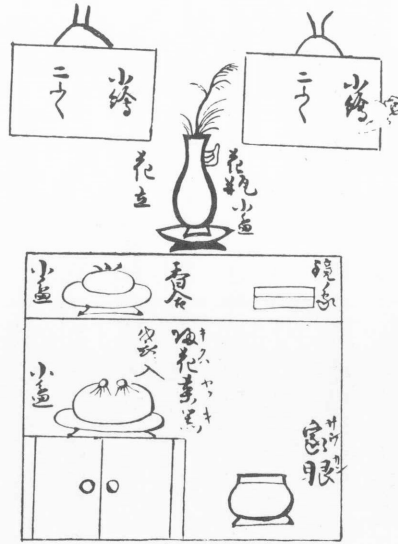
一同北かきつくしの御間、西北の一間に御違

棚置、紫檀、其上の小かへに小繪の二幅

かゝる也、御たなの置物如此御障子の

繪秋の草花ませかきによし

小繪
こふく
小繪
こふく
花瓶小盆
花立
鏡ノ家
香合
小盆
象眼
歸花薬器
袋入
小盆



(圖 八 第)

一同北の石山(の)御間、北東一間間中、床御座

あり、上に御おしいた、御繪、三具足、如常、

ひがしに間中のちがひたな有、置物如斯

御しやうしの繪石山、せた大津まで御

座有

(第九圖略)(能阿彌珠光宛第四圖に似る)

一東の方床の下違棚にそひて御書院有莊如此

(第十圖略)(石鉢三個、右に拂子中央に釣香爐のある圖)

一同北西御納戸御間一間間中、御納戸かは、

障子二枚こし障子さまなり、もへきのもん

紗にてはらる、引手ちやの糸(御)うちには赤地(の)

君 臺 觀 左 右 帳 記

一段子の帳御か、りあり御北むき東の(方)間

中の違棚上には御あふら、火の道

具置る、二枚障子をかいの板にてはら

る、御置物如此、御座敷繪馬遠様花鳥、

(第十一圖略)(能阿彌珠光宛第五圖に似る。但し上部天袋の所基盤目になる)

一西の方に御文同一をかる、崩(黄)地段子文雲

鶴御文しろし

一同にし御茶湯の間、西北一間御棚御をきもの

小川御所のと同前、御障子の繪、すみ

繪、山水夏珪やう

以上

一 常御殿

一 御しん所馬違様山水、人形、御納戸御違棚

御座有、御置物無御座(候)

一同東向晝の御座所、御置物なし

一南八景の御間戊亥のすみに(御違棚上に御硯宮唐木、次の重

に)しほ筒色々の

青磁のもの置る、

(一同西四間耕作の間、良すミ御つし棚置物小川の御所と同前、

御硯文臺御ひんの道具、同前)

(一同西六間、北東一間に基盤將基双六盤三面おかる、)

一晝の御座所の北の落間、和尚様人形、御置物

なし

三七

一同西三間、めしの御茶湯御座有、御釜しろ

かね御水指、水こほし、(胡銅)ことうかくれか、茶

碗(物)、御けいさん(建蓋)、臺、御茶壺、文琳、御うかい

茶碗、(鏡州)にようしう、其外茶碗のつは、

つけ物、色々入ておかる、

一同西の御六間御ゆとのの上玉(湯殿のうへ)礪様山水、

御置物(は)御座なし、

一晝の御座所の丑刀に、四帖御間有、束む

きに一間の御書院有、つねにいひつなりの

花瓶 胡銅(乾)に花たてられて、唯一

つをかる、戌亥の角に御違棚置る、墨跡のよこ繪一

幅かゝる、棚の上には文臺をかれて、御書物

一帖をかる、其外漢書(カシ)をかる、御座敷には

色紙をかる、御書院の脇には

官女二幅有 王立本筆をかる、

一同北四間御たき火の間御たき火の道

具をかる、

一御持佛堂丑刀四帖半敷、(御)圍爐裏(南)なん

はん物つりもの、(餅釜)ゑふこ水指、同半桶柄杓

立、細口ことうの水こほし、四方ことうふた

置、(胡銅鎖)ことうくさりはつねのことし。

一北の方東一間は書院、硯、筆架、筆、墨、中

に文臺、書物、一帖をかる、西の脇に漢書あま

たつまる、卷物二三巻をかる、はしら饒

のふくろ色々、同西、間中違棚、建蓋(ケサ)、臺に

小壺、茶筌、茶杓盆にすえてをかる、下

重には食籠、剔紅、菱花、

一同西六間、北西兩をうくる、南の中柱とを

りに曲録をかれて上に夢窓國師

墨跡二幅かけらる、

一西指庵納戸の内にきよくろくの上に

ふとんをかる、まはりなけしには、(拂子)ほつす

しつへい、以下かけらる、いろり圓し、書院東

向北のきはに書物をつまる、中に硯箱

に入上に墨(スミ)おかる、筆立、水入ことう燭臺

燈おかる、

一次の南の間戌亥角ニ違棚おかる、上ニ

文臺、双紙一帖おかる、横繪墨跡おかる、

一次西の四帖敷、障子、夢窓國師道歌

色紙おかる、飛鳥井 柏木殿入道殿御筆

一次北二帖敷北東間中御茶湯棚、

上重、建蓋推鳥臺、(方)盆、推鳥、小壺、

茶筌 茶杓おかる、下の重に食籠

脇一ツイ
花瓶
中ニハチト
大キナルト
花瓶可然候
又ハ香爐ヲ
モ可被置候
花わき
花瓶

この二つ書
は第二の書
次の説明の
如く、圖の
に書き、そ
で、東山殿
とは、關係
ない一般
なるから、
つ書の、
異本が、
へいやうに
思

一四幅一對の時は三具足、不置候、如此わ
きの一對花瓶にて、中はかわり候、大成
花瓶可然候左候はすハ大成香爐可
置なり四幅のときの本飾如此候、三間にても
貳間又一間間中も可爲同前候

(圖 二 十 第)

抹茶壺形 (壺の圖廿三個略)

| | |
|---------|------|
| かたつき | 丸壺 |
| ひたち帯 | ふんりん |
| すいてき | すいてき |
| ゆとう | ろてい |
| 大かい | 柿 |
| なつめかたつき | なすび |
| かうし | そん |
| るいさ | てかめ |
| | はんとう |

君臺觀左右帳記

えふこ
へうたん
えんさかたつき
しりふくら
せいし
つるくひ

盆香合ほり物の名

一剔紅チッコウと云は地にこまかに水雲(菱)(輪違)ひしワちかへ
なとほりてそのうへに人形、屋躰、花鳥など
ほるなり色あかし
一推紅ツイカウ色あかし、手ふかくあつくとほりて
ほりめにすちあり、ついこうと云
一推朱ツイシュ、色あかし、すこし手うすなり、ほりめ
にかさねのすしもなし、
一金糸キンシあかし、ほりめに、いろ／＼のかさねのすち
おほく手ふかくほりめあつし亦いろくろきもあり、
上くろくほりめもくろ
し黒金糸クロキンシといふ也
一紅花緑葉カウハリョクヨウ、花鳥をはあかく木の枝葉を
はあをくぬる也
一桂漿色ケイヤウくろし、ほりめにはあかきかさねの
すち一又は二あるなり、又地をあかくぬり
たるあり、地くれないのけいしやうと云(弁)
そうなり

三九

一犀皮、色くろし、ほりめひろくあさく赤

さいろかう色のやうに見ゆ

一推鳥、けいしやうのくり〜にて地の色

黄うるしみへす、地もくろし、くり〜に

なるものなり

一推漆ついでしゆ、ついかうのくり〜にあり、

これも地のさうるしみえす、地もあかし

一剔金つねに日本にも多し

玳瑁蒔繪

土物

一曜變(といふは)建蓋の内にて無上也、くすり

よの建蓋にかわりたり、口傳有万疋

一油滴ようへんのした、これもくすりつ

ねの建蓋にかはりたり五千疋、

一建蓋常に世上におし上々のハ、ゆて

きにもおとるへからす五千疋も可仕候也

一天目下御物などハ一向御座なき物也、大名

にも外様番所などにおかるとくすり

建蓋に似たるを、はいかつきと申、五百疋

一籠蓋(と云は)土白し、くすりあめ色にて、ほしの

ことくろくあり、色々也

一態皮蓋(と云は)土白し、くすりあめ色にて(内に)鳥花かた

なといろ〜文あり、くろきくすりにて

ある也

一鳥蓋(と云は)たうさむなりにて、土くすりハよき

建蓋のことし大小あり、

茶碗色々

一青(き)茶碗をは、青磁の物と云

白きちやわんをは白磁の物と云(もの也)、白きちや

わんのうつくしく、うすく、うちに色々

の文をこまかにするをハ饒州(茶)碗と云也

さかつき、うかい茶碗などにおほし

一瑠瑠くすりうすむらさき色にてこま

かにひらきたり、土むらさき色也、あをき茶

碗にくはんにう有、當世ハ定州ひ、きと

云、むかしよりあをくわんにうと申(候)

一聞香爐にまきる、事あり、火をあらく

とり候てひ、き(候)を定州ひ、きと申(候) ます

をまきらかす事也

一檮香爐 桔梗口、燭臺 此二色茶碗の三具足

の道具也

金物之類

一三具足 龜鶴燭臺 香爐 花瓶 土柏

子口 鏞無 二重鏞 丸花瓶 壺花瓶

細口 柑子口 龜形 結龍 双花瓶 栴立

耳口 石鉢 鴨香爐 風爐 水指 水覆

杵立 胡銅、紫銅、宣旨銅、鈴、鑪、鉢、象眼、七寶、瑠璃、象眼ハことうに入たるを云なり亦鐵の物にさうかんのことく

候をハ焼付と申候

一茶碗三具(足)の時燭臺如此

桔梗口臺と申候、高さ七寸八寸候、中ニあな

あり花も立さうに候

たかさ一尺あるハまれニ候

(圖略)

なんりやう如此こしらへて上のあなに入れて

らうそくをたて候

櫛香爐

三具足にとり

あハせられ候

歸花藥器

中わう

(圖略)

卓ニおか

すへりかうろに

そひておかる、

已上

此一卷注たる物一向無所持候條近年於殿

中見及申候分注申候、昔之御物御重寶共承

及候而見不申候(物は)なりをも、しかく覺不申候

此しるし候分大略慥覺候分にて候御不審

乃事候は、尋候て熟に口傳可申候加様にハ

申候へ共各正躰なき事もあるへく候不可有

他見候者也

大永三年癸未十二月吉日

松雪齋鑑岳真相(華押)

過剋齋 王床下

大永七年七月十六日七日兩日之間寫之了

此本者 公方様ニ御同坊千阿彌佛へ相

阿彌ヨリ直筆繼目ニ判ヲ居、相傳候本ヲ

從千阿彌陀佛直借申候而書寫申候也

大永七年七月十九日

千阿(華押)